

# 令和元年度「カラーユニバーサルデザイン普及キャラバン隊事業」事業実施報告

令和2年2月5日

団体名 NPO 人にやさしい色づかいをすすめる会

事業名 カラーユニバーサルデザイン普及キャラバン隊事業

## 1. 事業の内容

### (1) 事業の目的

ワークショップをとおして色覚の多様性について理解を深め、カラーユニバーサルデザインの必要性を認識するとともに、カラーユニバーサルデザインの普及促進を目的とする。

### (2) 実施内容

愛知県内の小・中学校教職員を対象に、「学校のカラーユニバーサルデザイン推進支援講座」を2019年10月から12月の2ヶ月間に計5回、以下の5会場で実施した。

実施日時	参加人数	会場
2019年10月21日(月) 15:10～16:40	20人	半田市立岩滑小学校 図書室 〒475-0962 愛知県半田市岩滑高山町5丁目55
2019年11月23日(水) 13:30～15:30	18人	愛西市立草平小学校 視聴覚教室 〒496-8015 愛知県愛西市草平町北田名57
2019年10月30日(水) 13:30～15:30	9人	東栄町立東栄中学校 会議室 〒449-0214 愛知県北設楽郡東栄町大字本郷宮平1-1
2019年11月28日(木) 15:00～16:30	8人	豊田市立明和小学校 図書室 〒444-2607 愛知県豊田市平沢町赤田和21-8
2019年12月17日(火) 15:00～16:30	22人	刈谷市役所 7階702会議室 〒448-8501 愛知県刈谷市東陽町1丁目1
合計	77人	

講座は1時間30分から2時間、レクチャーと個人・グループワークを通して色覚の多様性およびカラーユニバーサルデザインの考え方と手法を体験的に学べるプログラムとなっている。進行役の講師1名(当会NPO人にやさしい色づかいをすすめる会代表)、色弱当事者1名と補助スタッフ1名の3人態勢を基本とし、概ね次のように進めた。

まず講師が概要を説明してから、色弱当事者が自らの色覚の特徴を具体的に語り、次に受講者全員が眼鏡型の色弱模擬フィルタを着装して(色弱者の見え方で)色紙を分類したり、チョークによる板書やビブスの色の見分けにくさをチェックして改善案を考え、結果を皆で共有したりするワークを行う。そして、すべてのひとに配慮した色づかい、すなわちカラーユニバーサルデザインの必要性を十分に理解してもらったところで、講師がその実践事例と基本的な手法について、ワークと関連づけながら解説する。

以上の流れで5回いずれも滞りなく進めることができた。講座全体の様子を写真とともに説明したスライド資料(当会内部向けの説明資料)を添付しているので、参照されたい(資料06)。

## 2. 参加者状況

参加者は小学校教諭 59 人、小学校養護教諭 2 人、中学校教諭 13 人、中学校養護教諭 1 人、中学校栄養教諭 1 人と特別支援学校教諭 1 人の計 77 人であった。平日の授業終了後に研修として全教員が受講する学校がほとんどで、欠席者もおらず事前に知らされた人数通りの参加となった。参加者の内訳は以下の通り。

2019 年 10 月 21 日(月) 半田市立岩滑小学校 20 人

2019 年 10 月 30 日(水) 東栄町立東栄中学校 9 人(養護教諭 1 人, 栄養教諭 1 人を含む)

2019 年 11 月 23 日(土) 愛西市立草平小学校 18 人(養護教諭 1 人を含む)

2019 年 11 月 28 日(木) 豊田市立明和小学校 8 人(養護教諭 1 人を含む)

2019 年 12 月 17 日(火) 刈谷市役所(教務主任自主研修会)22 人(特別支援学校教諭 1 人を含む)

## 3. 担当者の感想・まとめ

以下に、担当者で事業全体の振り返りを行った際に出された主な感想を挙げて、まとめたい。

- ・応募した学校が少なかったことを残念に思う。研修を含む年間の事業計画は前年度中に決まることが多く、今回の募集時期が8月下旬から9月上旬と年度途中であり、期間も短かったことが影響したことは否めない。募集は企画の正式な委託契約締結を経なくてはできない。企画提案の採択通知を受け取ってから締結まで1ヶ月かかった。もし当会が採択決定の直後から独自に募集活動を開始できれば、もう少し応募数を増やすことができたかもしれない。実際に2、3校から早い時期に問い合わせをもらったが、応募期間の関係で見送られた。資金を得て行う事業なので、できる限り多くの学校が参加できる最良の方法を模索できればと思う。
- ・事業の目的である「ワークショップをとおして色覚の多様性について理解を深め、カラーユニバーサルデザインの必要性を認識」していただくことは、十分に達成されたと思う。ワークやディスカッションに熱心に取り組む先生方の様子や発言から、そのことを十分に感じることができた。
- ・現時点で色弱の生徒が何人いるかを正確に把握している学校が1校もなかったことは意外であった。生徒自身や保護者からの配慮要請がなければ、教師は気づくことが難しい。だからこそ色覚の多様性を理解し、日常的に生徒を観察する必要がある。講座を通してそのことが伝えられてよかった。
- ・色弱の当事者自らが見え方の特徴や日常生活で不便を感じることを説明すると、先生方の反応がよかった。通常シミュレーション画像を示すだけだが、そこに当事者の視点が加わることで、より説得力をもつのだろう。色覚タイプの違いやそれぞれの見え方の特徴、違いが生ずる原理等を理解することは難しい。時に主観を交えた当事者の語りは、色覚の多様性を理解するうえで大きな力になることを改めて感じた。
- ・色覚について関心があるかを問うたアンケートでは、全体の64%が「色弱や色覚(色の見え方)の多様性について、これまであまり意識したことがなかった」と回答している(資料 05)。愛知県の学校ではカラーユニバーサルデザインの普及はある程度進んでいるのではないかと期待していた。というのも一昨年(2018年)の12月に愛知県の障害福祉課が主催し当会が実施した愛知県カラーユニバーサ

ルデザイン普及ワークショップでは47校が参加して反響もあったし、翌年(2019年)3月には愛知県教育委員会が「カラーユニバーサルデザインの推進について(通知)」を県下の小・中・高等学校に送っているからである。しかし普及促進達成までの道のりはまだまだ長いことがよくわかった。

- ・講座のコンテンツは5回すべて同じだが、講義とワークを切り替えるタイミング、説明のあり方等を現場の状況に応じて変化させることで、回を重ねるごとに講座の質を高め、進行のスキルアップができた。講座終了後にミーティングを欠かさず行い、反省点と改善策を話し合ってきた成果であると思う。
- ・学校現場におけるカラーユニバーサルデザインとしてまず語られるのはチョークの色づかいである。いずれの回も、参加者に普段の板書を再現してもらい、それを皆で色弱模擬フィルタを装着してチェックするワークを行った。先生方自身がピンク系の従来の赤、青と緑のチョークの見えにくさを実感することはとても重要で、その体験が今後の指導に生かされることを期待したい。今日の学校現場において「チョークは白と黄色を使用する、赤は使用しない」との考えはある程度浸透しているように見える。しかしどこか無批判に捉えられているところもあり、そこをもっと丁寧にクリティカルな視点でチョークの色について考える場があってもよいと感じた。今回は eye チョーク等 CUD 認証を得たチョークの実演・紹介の時間が取れなかったため、サンプルを渡して生徒の反応を教えてほしいとお願いしてきた。その結果を踏まえて検討していきたい。
- ・講座の後にどのような改善に取り組んだかを報告するよう依頼した。1校から、eye チョークを使った板書について半数の生徒が見やすくなったと答えたとの報告をいただいた。色弱の子どもにどう見えたのかが気になるが、そこまではわからない。講座の参加校に限らず eye チョークをサンプルとして学校関係者に配布しているが、そこからわれわれが求める情報を得るためにもヒヤリングの必要性を感じた。
- ・教務主任研修の担当者から、参加者全員に対して改めて改善例の報告書を障害福祉課に提出するよう依頼したと連絡があった。応じてくれる学校をいとぐちに、チョークの問題も含めて先生方とカラーユニバーサルデザインをいかに推進していくかを今後も共に考えていきたい。

以上